

中國の古典詩に見える蝙蝠

—宋代の詩を中心に—

一、序

伏翼昏飛急　　伏翼　昏くらに飛ぶこと急なり
營營定苦飢　　營營たるは　定めて飢えを苦くとすればなり
聚蚊充口腹　　蚊を聚あめて　口腹を充たすも
生汝亦奚爲　　汝を生かして　亦た奚なにをか爲さん

南宋・范成大の「蝙蝠」と題する五言絶句である。腹を空かせた蝙蝠が、餌を求めてひっきりなしに夕暮れの空を飛び回る様子を詠う。「伏翼」は、蝙蝠の異名。「營營」は、休む間もないさま。

筆者は前稿において、唐代までの詩に見える蝙蝠について、それを《主題として詠うもの》と《素材として詠うもの》とに

矢　田　博　士

分けて概観した⁽¹⁾。唐代までの詩においては、蝙蝠が主題として詠われる場合は、嫌悪の対象、不快な存在、不幸または哀れな存在として、概ね否定的に描かれる傾向が認められた。素材として詠われる場合は、寂れた場所やうらぶれた状況を詠う際にしばしば登場するなど、負的なイメージを伴うものとして描く例が見られる一方で、長壽の象徴、神秘的・脱俗的なイメージを添えるものとして、その存在を肯定的に描く例も見られた。

范成大の「蝙蝠」詩は、宋詩の中で蝙蝠を主題として詠う唯一の例であるが、後半の二句に、「たくさんの蚊を捕まえて空腹を満たしたとしても、おまえなんぞを生かして、いったいどうしようというのか。」とあるように、ここでも蝙蝠は否定的な存在として詠われていることが、まずは確認できる。ただ、ここで注目したいのは、蚊を捕食するという蝙蝠の習性が詩に

詠われている点である。蝙蝠は、日本では「蚊喰鳥」とも呼ばれるように、蚊を餌とする。唐代までの詩には、蝙蝠のこうした習性を詠う例は皆無であった。しかし、宋代においては、「蚊を喰う蝙蝠」がしばしば詩に現れるようになる。

本稿では、蝙蝠を詠った宋代の詩を概観し、唐代までの詩との共通点や宋詩における独自の展開などについて、確認してみたい。

二、蝙蝠を詠った宋詩の一覧

宋詩の中から、蝙蝠を表す「蝙蝠・伏翼・飛鼠・僊鼠」という語をもとに、蝙蝠を詠った詩の用例を調べたところ、以下の三十四例が確認できた。そのうち、蝙蝠を《主題として詠うもの》は、冒頭に掲げた〈26范成大「蝙蝠」〉の一例のみで、他の三十三例はいずれも《素材として詠うもの》である。

- 01 梅堯臣「聚蚊」
- 02 梅堯臣「諭鳥」
- 03 梅堯臣「孫曼叔暮行汴上、見鶻擊蝙蝠以去、語於予」
- 04 梅堯臣「和曇穎師四明十題」其十「丹山洞」
- 05 陳舜俞「林屋洞」
- 06 文同「將赴洋州書東谷舊隱」
- 07 蘇頌「與諸同僚偶會賦八題」其二「待燈」
- 08 蘇軾「洞霄宮」

中國の古典詩に見える蝙蝠（矢田）

- 09 蘇軾「至濟南李公擇以詩相迎次其韵二首・其二」
- 10 蘇軾「上巳日與二子迨過遊塗山荆山記所見」
- 11 蘇軾「聞子由瘦」
- 12 蘇轍「子瞻聞瘦以詩見寄次韵」
- 13 張耒「夏日雜感四首・其四」
- 14 晁說之「洪澤守閘和二十二弟韵」
- 15 洪朋「游南汰寺」
- 16 唐庚「受代有日呈譚勉翁謝與權」
- 17 鄧肅「送春」
- 18 李石「秋夜待月」
- 19 王十朋「宿多福院」
- 20 鄧深「豐城道中」
- 21 陸游「後陵永慶院在大西門外不及一里蓋王建墓也有一石幢猶當時物又有太后墓琢石爲人馬甚偉」
- 22 陸游「閑居七首・其五」
- 23 范成大「烏戍密印寺」
- 24 范成大「高樓曲」
- 25 范成大「嘲蚊四十韻」
- 26 范成大「蝙蝠」
- 27 朱熹「題梵天方丈壁」
- 28 王質「含山寺」
- 29 趙蕃「晚作」

30張鑑 「桂隱紀詠」其十八「玩芝軒」

31史彌寧 「按圖志去城而南有巖曰金紫昔蕭千巖擅一世詩聲

乾道閒嘗寓家郡之西湖意其必有題詠鑿之崖壁一

日訪之則了無所睹方重爲此巖太息而別乘示似佳

篇勉之著語以紀其勝賦五十六字」

32劉克莊 「釋老六言十首・其六」

33釋文珣 「夜思」

34釋文珣 「出越城訪歸隱庵主人」

三、唐代までの詩の流れを汲むもの

蝙蝠は、鳥でもなければ獣でもないその異様な形状や、暗闇に棲息し夜間に活動するその異常な習性などから、唐代までの詩において主題として詠われる際には、嫌惡の對象、不快な存在、不幸または哀れな存在として、否定的に描かれていた。⁽²⁾その點は、宋代においても同様で、冒頭で確認した通り、蝙蝠を主題として詠う唯一の例である（26范成大「蝙蝠」）でも、後半の二句で、蝙蝠の存在價值を否定するかのような見解が示されていた。

では、素材として詠う場合はどうか。以下、確認してみよう。

【寂れた場所やうらぶれた状況下に現れる蝙蝠】

上記のような否定的なイメージを伴っているためか、唐代ま

での詩では、蝙蝠は、寂れた場所や作者のうらぶれた状況などを際立たせる素材としても、しばしば用いられた。⁽³⁾宋詩においても、18 21 27が前者の例に、12 14 24が後者の例に該當しよう。
 〈18李石「秋夜待月」〉では、秋月を觀賞するという風流さとはかけ離れた自らの住居のみすばらしさを表す素材として、狐や狸とともに蝙蝠が以下のように描かれる。

一 任簷牙沸蝙蝠

一 えに任す 簷牙に 蝙蝠の沸くに

忍將明鏡照狐狸

明鏡を將って狐狸を照らすに忍びんや

〈21陸游「後陵永慶院……蓋王建墓也有一二石幢猶當時物……」〉でも、五代前蜀・王建の墓の寂れ果てた様子を表す素材として、餓えた鳥とともに蝙蝠が以下のように描かれる。

「經幢」は、經文が刻まれた石柱。

攫飯饑鳥占寺鼓

飯を攫ふる饑鳥は 寺鼓を占め

避人飛鼠上經幢

人を避くる飛鼠は 經幢に上る

〈27朱熹「題梵天方丈壁」〉は、租税を納めたため、托鉢をしなければ食っていけない野僧の窮状を描いたもの。その野僧の住む人氣のない寂れた寺院に、蝙蝠が以下のように現れる。

輸盡王租生理微 王租を輸し盡くして 生理は微なり
 野僧行乞暮還歸 野僧 乞を行ひて 暮に還た歸る
 山空日落無鐘鼓 山は空しく日は落ちて 鐘鼓無く
 只有虛堂蝙蝠飛 只だ虚堂に 蝙蝠の飛ぶ有るのみ

〔12蘇轍「子瞻聞瘦以詩見寄次韵」〕は、雷州（廣東省）での作。新法を推し進める哲宗の親政下であって、兄の蘇軾が惠州（廣東省）さらには儋州（海南省）に流され、それと連動して蘇轍もまた、瓊州海峡を挟んで對岸の雷州に流されていた。粗惡な食糧事情により蘇轍が瘦せたことを耳にし、その身を案じた蘇軾が贈ってきた〔11「聞子由瘦」〕詩に次韻したもので、雷州での窮状を以下のように詠う。「屈伸」は、身體を曲げることと伸ばすこと。ここでは境遇の順逆に應じた身の振り方を喩える。「倒掛」は、「倒懸」に同じく、身體を逆さまにつり下げられること。ここでは、困苦を極めた状態を喩える。

屈伸久已效熊虎 屈伸 久しく已に熊虎に效ひ
 倒掛漸擬同蝙蝠 倒掛 漸く蝙蝠と同じからんと擬す

〔14晁説之「洪澤守閘和二十二弟韵」〕は、年の瀬の夕暮れに、淮河中流にある洪澤湖（江蘇省淮安市）の水門を獨り守る自身の境遇を嘆いたもの。當時、淮河の北岸には金の軍が迫っている

中國の古典詩に見える蝙蝠（矢田）

〔4〕 眼前に廣がる景色の中、蝙蝠が以下のように現れる。「頡頏」は、上下に飛ぶさま。「越起」は、行きなやむさま。

蝙蝠倒懸徒頡頏 蝙蝠 倒に懸かりては 徒らに頡頏たり
 獼猴徐步謫越起 獼猴 徐ろに歩みては 謫りに越起たり
 歲窮雲際行求雁 歲は窮まり 雲際 行きて雁を求め
 日暮溪頭坐羨魚 日は暮れ 溪頭 坐して魚を羨む

〔24范成大「高樓曲」〕もまた、年の瀬の夕暮れに異郷にある旅人の孤獨を詠ったもので、その郷愁を募らせるかのように蝙蝠が現れる。

歲暮天涯客 歲暮 天涯の客
 黃昏蝙蝠飛 黃昏に 蝙蝠 飛ぶ
 高樓人不到 高樓 人 到らず
 小雨怯單衣 小雨 單衣なるを怯む

【長壽の象徴、神祕的な存在としての蝙蝠】

異様な形状や異常な習性から、否定的な存在として捉えられがちな蝙蝠であるが、その一方で、長壽の風が蝙蝠に變身する、あるいは長壽の蝙蝠は白色に變色するとの傳承もあることから、長壽の象徴としての側面も併せ持つ。また、昇仙を目指す道教

中國詩文論叢 第三十四集

が流行した唐代では、山中の洞窟は仙界に通じているとする「洞天」説の影響もあり、詩人たちも洞窟に足を運んで、そこで目にした蝙蝠をしばしば詩に詠み込んだ。⁽⁵⁾ 仙界へと通じる洞窟に棲息する蝙蝠は、それゆえに神祕的な存在と見なすこともできよう。宋詩においても、洞窟に棲息する蝙蝠を詠んだ例が四例(04 05 08 31)、長壽の象徴として詠われる例が一例(32)見られる。そのうちの04 05 08の三例が「洞天」説あるいは「白蝙蝠」の傳承を踏まえていることは、明らかである。

山無鳳皇飛 山に鳳皇の飛ぶこと無きも

洞有仙人跡 洞に仙人の跡有り

蝙蝠大如鴉 蝙蝠 大なること鴉の如し

莓苔遍上屐 莓苔 遍く屐に上る

(04梅堯臣「和曇穎師四明十題」其十「丹山洞」)

洞天三十六 洞天 三十六

第九曰林屋 第九を林屋と曰ふ

鸞鳳無消息 鸞鳳 消息無く

但見白蝙蝠 但だ白蝙蝠を見る

(05陳舜俞「林屋洞」)

庭下流泉翠蛟舞 庭下の流泉 翠蛟のごとく舞ひ
洞中飛鼠白鴉翻 洞中の飛鼠 白鴉のごとく翻る

(08蘇軾「洞霄宮」)

〔31史彌寧「按圖志去城而南有巖曰金紫……」は、金紫巖(浙江省杭州市桐廬縣)という景勝の地に赴いた折りの作。〕景定巖州續志〕卷七に、「金紫巖在桐廬鄉、距縣十五里。相傳巖有異光若金紫、因以爲名(金紫巖は桐廬郷に在りて、縣を距つること十五里なり。相ひ傳ふるに、巖に異光有りて金紫のごとければ、因りて以って名と爲す、と)とあり、また冒頭の二句に、「去城不隔五七里、雲竇誰鑿能怪奇(城を去ること五七里を隔てざるに、雲竇 誰か鑿りて能く怪奇なる)」とあるように、そこは金紫色に光り輝き、雲が出没する上部には洞窟が見える奇觀の地であった。その頸聯の二句に、樂しげに上へ下へと飛び回る山鳥とともに蝙蝠が描かれる。「僊鼠」と表現されていることから窺えるように、奇觀の地にふさわしい神祕的な存在として描かれていると見てよいであろう。

山禽上下有餘樂 山禽 上下し 餘樂有り
僊鼠往來無倦時 僊鼠 往來し 倦む時無し

〔32劉克莊「釋老六言」十首其六〕は、道教の祖とされる老

子を主題としたものである。道を修めて壽を養い、壽命が百六十餘歳とも二百餘歳ともいわれる老子を、「白蝙蝠」の傳承を用いて以下のように詠う。

貌似金毛獅子 貌は金毛の獅子に似たり
心疑白蝙蝠精 心は白蝙蝠の精なるかと疑ふ

【脱俗的なイメージを添える蝙蝠】

長壽の象徴、神秘的な存在としての側面を合わせ持つ蝙蝠は、唐代においてはさらに、佛教寺院という宗教的な空間や、詩人の身を世俗から遠ざけてくれる空間で作られた詩の中にも、脱俗的なイメージを添える素材として描かれた。宋代においても、佛教寺院を訪れた折りの作に、しばしば蝙蝠が登場する。以下に掲げる1519、2328の例がそれである。

〈15洪明「游南汰寺」〉は、南汰寺という名の寺院を訪れた折りの作。夕暮れに寺院に到着した詩人を出迎えるかのように、屋根の梁のあたりをめぐる蝙蝠が、以下のように描かれる。

蓮界劃然開 蓮界 劃然として開き
珍木蔭寬涼 珍木 蔭は寬涼たり
暝投上方宿 暝に上方の宿に投ずれば
蝙蝠遶屋梁 蝙蝠 屋梁を遶る

中國の古典詩に見える蝙蝠（矢田）

〈19王十朋「宿多福院」〉は、「多福（福が多い）」という縁起のよい名の古刹を訪れた折りの作。「古刹名多福、初來宿上方（古刹 名は多福、初めて來たりて 上方に宿る）」の二句に續けて、風情のある古刹の古びた様子を、以下のように描く。

蜂窠懸敗壁 蜂窠 敗壁に懸かり
燕壘滿空梁 燕壘 空梁に滿つ
蝙蝠沸盈室 蝙蝠 沸きて室に盈ち
塵埃堆滿床 塵埃 堆くして床に滿つ

〈23范成大「烏戍密印寺」〉では、「僧房皆爲狹門深洞、極暗。行百餘步不辨人（僧房は皆な狭き門に深き洞たりて、極めて暗し。行くこと百餘歩なるも人を辨せず）」という自注とともに、以下のように詠う。

花木禪房都不見 花木 禪房 都て見ず
但餘蝙蝠畫羣飛 但だ餘す 蝙蝠 畫に羣れ飛ぶを

〈28王質「含山寺」〉では、「心閒逢人謝禮樂、身倦到枕即江湖（心 閒かにして人に逢ふも 禮樂を謝し、身 倦めば枕に到りて 江湖に即く）」と、世俗の束縛から解放された喜びを詠ったあとで、蝙蝠が以下のように描かれる。

中國詩文論叢 第二十四集

夢回石壁半斜照 夢に石壁を回れば 半ば斜めに照り
 蝙蝠打人山鳥呼 蝙蝠 人を打ち 山鳥 呼ぶ

以上の通り、寺院という宗教的空間に登場する蝙蝠は、概ね脱俗的なイメージを添えるものと見てよいであろう。

では次に、詩人の身を世俗から遠ざけてくれる空間での作、および退隱に對する憧れや脱俗の境地を詠った詩の中に現れる蝙蝠の例を見てみよう。06 16 30 33 34 がそれに該當する。

〈06 文同「將赴洋州書東谷舊隱」は、文同が洋州（陝西省漢中市西鄉縣）へ赴任する前に、「東谷（四川省綿陽市鹽亭縣）」の舊居に立ち寄った折りの作。文同にとって「東谷」の舊居とは、俗塵から身を遠ざけることのできる空間であった。本詩もまた、冒頭に「晚客無一來、獨步入東谷、園林已成就、此景頗不俗」〔晚客 一來無し、獨り歩みて東谷に入る、園林 已に成就す、此の景 頗る俗ならず〕とあり、末尾の二句にも「淵明豈俗士、幸此有松菊」〔淵明 豈に俗士ならんや、幸ひ此に松菊有り〕とあるように、退隱に對する憧れを詠う。蝙蝠は、「往年讀書處、宛爾舊茅屋、雖然小破壞、修整可數木」〔往年書を讀むの處、宛爾たり 舊茅屋、小しく破壊すと雖然も、修整 數木ばかり〕の四句に續けて以下のように描かれる。

開門拂軒窗 門を開き 軒窗を拂へば

無限起蝙蝠 限り無く 蝙蝠 起つ
 縱橫列蟲網 縱橫に 蟲網 列なり
 不免自掃撲 自ら掃撲するを免れず

〈16 唐庚「受代有日呈譚勉翁謝與權」は、官を去ることになった唐庚が譚勉翁と謝與權に贈ったもの。「受代」は、任務を交代させられること。冒頭の二句に、「東津曉作招隱賦、西樓暮得思歸引」〔東津にて曉に作るは 招隱の賦、西樓にて暮に得るは 思歸の引〕とあるように、退隱に對する憧れを詠う。蝙蝠は、譚勉翁と謝與權との宴會が終わり、家へと向かう道すがらに、以下のように現れる。

醉歸半路飛蝙蝠 醉ひて歸れば 半路 蝙蝠 飛び
 餘興中宵伴蚯蚓 餘興 中宵 蚯蚓を伴ふ

〈30 張鑑「桂隱紀詠」其十八「玩芝軒」は、臨安通守であった張鑑が疾病を理由に退任を申し出て、「桂隱」に隱居した折りの作。「桂隱」とは、張鑑が南湖（杭州市余杭）のほとりに築いた園林の名。張鑑はさらに、そこに堂や亭など數多くの建造物を造っては、その一つ一つに名前を付けていた。「桂隱紀詠」詩は、その一つ一つの建造物を詩に賦し、隱居後の「區區樂閒の心」を表したもので、「玩芝軒」詩もそのうちのの一つで

ある。⁽¹⁰⁾そこに蝙蝠が以下のように詠われる。

陰洞親尋遍 陰洞 親ら尋ねること遍し
燈驚蝙蝠飛 燈に驚きて 蝙蝠 飛ぶ

〈33釋文珣「夜思」〉は、僧籍にある詩人が秋の夜に心靜かに思念するさまを詠ったもので、蝙蝠が以下のように描かれる。

伏翼打窗飛 伏翼 窗を打ちて飛び
孤螢隨草沒 孤螢 草に隨ひて沒す
予心適有會 予が心 適まさに會さる有り
還就幽人說 還た幽人に就きて説かん

〈34釋文珣「出越城訪歸隱庵主人」〉は、釋文珣が「歸隱」という名の庵に住む人を訪ねた折りの作。「歸隱庵」という名からも、この主人もまた世俗を避けて暮らす人物と見られる。その「歸隱庵」周邊の風景を詠った中に、蝙蝠が登場する。

山於屋外參差見 山は屋外に於いて 參差として見え
水到門前款曲流 水は門前に到りて 款曲として流る
樹腹半空栖伏翼 樹腹 半ば空にして 伏翼 栖み
竹梢初動蔓牽牛 竹梢 初めて動き 牽牛 蔓はびる

中國の古典詩に見える蝙蝠（矢田）

【黃昏時や夜の訪れを認識させる蝙蝠】

唐詩においては、黃昏時から未明にかけて活動する蝙蝠の習性に着目し、晝夜の別を理解できるものとして描く例が見られた。⁽¹¹⁾逆に、事の異常さを示す比喩として、晝間に飛ぶ蝙蝠を描く例も見られた。⁽¹²⁾後者の例こそ見られないものの、宋詩においても、蝙蝠の活動時間帯の特殊性に着目し、黃昏時や夜の訪れを認識させるものとしてそれを描く例が、五例（07 09 10 17 20）見られる。07 09 17の三例は、深夜もしくは夜明けまで續く友人や同僚との酒宴を詠ったもので、その酒宴の開始時を蝙蝠の出現によって示すというものであり、10 20の二例は、親しい者と旅や遊山に出かけた折りの作で、夜の訪れを蝙蝠によって知るといえるものである。

〈07蘇頌「與諸同僚偶會賦八題」其二「待燈」〉は、末尾の二句に、「皎皎見寒光、良宵愜予心（皎皎として 寒光を見れば、良宵 予が心に愜ふ）」とあるように、月が白く輝くすがすがしい秋の夜に、心を満たしてくれる同僚との酒宴を詠ったもの。蝙蝠が舞い飛ぶ黃昏時に始まった酒宴、その楽しい時間が瞬時に過ぎていく様子を、以下のように描く。

黃昏蝙蝠飛 黃昏に 蝙蝠 飛び
空堂蟋蟀吟 空堂に 蟋蟀 吟ず
相對語未闌 相ひ對して 語は未だ闌ならざるに

不覺更漏侵 覺えず 更漏の侵すを

〔09蘇軾「至濟南李公擇以詩相迎次其韻」二首其二〕は、濟南（山東省）に至った蘇軾を、齊州の知事であった李常（字は公擇）が酒宴を開いて出迎え、その際に李常から贈られた詩に次韻したもの。その末尾の二句に蝙蝠が以下のように描かれる。「蝙蝠飛時」は、酒宴が始まった黄昏時を指す。「日正晨」は、時間が経過し、あっといふ間に朝を迎えたことを言う。

相從繼燭何須問 相ひ從ひて燭を繼ぐ 何ぞ問ふを須ひん
蝙蝠飛時日正晨 蝙蝠 飛ぶ時 日は正に晨なり

〔17鄧肅「送春」〕は、友人とともに酒宴を開いて、銀杯を傾けつつ、夜が明けるまで去りゆく春を見送ったもの。前掲の蘇軾の句をそのまま用いて、以下のように言う。

儻得新詩同刻燭 儻し新詩もて同に燭を刻むを得れば
不妨濁酒共傾銀 濁酒もて共に銀を傾むくるを妨げず
往來一氣何須問 往來 一氣 何ぞ問ふを須ひん
蝙蝠飛時日正晨 蝙蝠 飛ぶ時 日は正に晨なり

〔10蘇軾「上巳日與二子迨過遊塗山荆山記所見」〕は、蘇軾が

二人の息子（蘇迨・蘇過）と共に、塗山と荆山（湖北省西部）を遊覽した折りの作。塗山は、夏の禹王が妻を娶ったとされる山。荆山は、「和氏の璧」「完璧」などの故事で知られる寶玉が出土した山。歸る時には周圍がすっかり暗くなっていた状況を、空飛ぶ蝙蝠と對岸の松明の明かりによって認識する。

小兒強好古 小兒は強ひて古を好み
侍史笑流汗 侍史は笑ひて汗を流す
歸時蝙蝠飛 歸る時 蝙蝠 飛ぶ
炬火記遠岸 炬火 遠岸を記す

〔20鄧深「豐城道中」〕は、姻戚とともに豐城（江西省南昌縣）を旅した折りの作。作者自ら「聯步得姻戚、浪語殊謹譁、畢景自忘倦、所歷不覺遐（歩を聯ねて 姻戚を得たり、浪りに語りて 殊に謹譁たり、畢景 自ら倦むを忘れ、歷する所 遐きを覺えず）」と言うように、同行者との會話も弾み、周圍の景色が旅の疲れを忘れさせてくれる心樂しい旅であつたらしい。蝙蝠は、この四句に續けて以下のように現れる。夜を迎え水邊の宿に宿泊することになった作者たち、その夜を迎えたことを宿の壁際に飛ぶ蝙蝠と天空に登る月とによって認識する。

問宿于誰館 宿を誰が館に問はん

有軒臨水涯 軒有り 水涯に臨む

暗壁飛蝙蝠 暗壁 蝙蝠 飛び

皓月升蝦蟆 皓月 蝦蟆 升る

四、宋詩における新たな展開

ここまでは唐代までの詩の流れを汲む例について見てきたが、ここからは宋代に入って独自の展開を示す例について確認してみたい。

【蚊を捕食する蝙蝠】

すでに冒頭に掲げた〈26范成大「蝙蝠」〉のように、宋代になると、蝙蝠の習性の中でも蚊を捕食するという点に着目した例が現れる。蝙蝠のこうした習性を描いた例は、唐代までの詩には全く見られなかったが、宋詩においては〈26范成大「蝙蝠」〉の他にも、010213222529など、計七例が確認できる。

〈01梅堯臣「聚蚊」〉では、鋭い口で人の肌を刺し血を吸う蚊を、捕まえようとしてもしない蝙蝠を非難して、以下のように詠う。

利吻競相侵 利吻 競ひて相ひ侵し

飲血自求益 血を飲みて自ら益を求む

蝙蝠空翱翔 蝙蝠 空しく翱翔するのみにして

何嘗爲屏獲 何ぞ嘗て爲に屏獲せんや

中國の古典詩に見える蝙蝠（矢田）

〈02梅堯臣「諭鳥」〉では、逆に、幕の中に入っては忙しそうに蚊を捕まえる蝙蝠を、以下のように描く。

蝙蝠嘗入幙 蝙蝠 嘗て幙に入り

捕蚊夜何忙 蚊を捕へて 夜 何ぞ忙たる

〈13張耒「夏日雜感」四首其四〉では、蚊を捕まえることができない老いた蝙蝠の無能さを非難して、以下のように詠う。

無能老蝙蝠 能無きなり 老蝙蝠

乘夜出堂奥 夜に乗じて 堂奥より出づ

那能捕飛蚊 那ぞ能く飛蚊を捕へんや

未解聒耳聞 未だ解かず 耳に聒かまひずしくして聞ききを

〈22陸游「閑居」七首其五〉では、餌となる蚊虻とそれを捕食する蝙蝠とを對比して、以下のように詠う。

草闇蚊虻市 草は闇にまやかなり 蚊虻の市

林昏蝙蝠秋 林は昏し 蝙蝠の秋

〈25范成大「嘲蚊四十韻」〉では、蜘蛛とともに蚊の天敵とし

ての蝙蝠が描かれる。

伏翼佐掃除 伏翼 掃除を佐け

網蛛助收拾 網蛛 收拾を助く

〈29趙蕃「晚作」〉にも、人にとっては肌を刺して血を吸う害蟲である蚊が、蝙蝠にとつては空腹を満たす餌であることを踏まえて、以下のように詠う。

古屋黄昏蝙蝠飛 古屋 黄昏 蝙蝠 飛ぶ

爾飛干我竟何爲 爾 飛びて我を干すも竟に何をか爲さん

但愁蚊子且生翼 但だ蚊子の且に翼を生ぜんとするを愁ふ

飽爾亦當侵我肌 爾を飽かしめ亦た當に我が肌を侵すべし

その他に、宋代に入つて新たに確認されるものとしては、「猛禽類に捕獲される蝙蝠」を描いた〈03梅堯臣「孫曼叔暮行汴上、見鶻擊蝙蝠以去、語於予」や「食材としての蝙蝠」を描いた〈11蘇軾「聞子由瘦」〉などがあるが、いずれも一例ずつという極めて特殊な例である。

【猛禽類に捕獲される蝙蝠】

〈03梅堯臣「孫曼叔暮行汴上、見鶻擊蝙蝠以去、語於予」〉は、

夕暮れに汴水のほとりでハヤブサが蝙蝠を攻撃しているのを見たと言つた孫曼叔の話をもとにしたもので、ハヤブサが蝙蝠を捕獲する様子を以下のように生々しく描く。

瞥下攫蝙蝠 下を瞥して 蝙蝠を攫み

去以填腸饑 去りて以つて腸の饑うるを填む

【食材としての蝙蝠】

〈11蘇軾「聞子由瘦」〉は、新法を推し進める哲宗の親政下にあつて、儋州（海南省）に流されていた時期の作。連坐して瓊州海峡を挟んで對岸の雷州（廣東省）に流されていた弟の蘇轍が食糧事情の悪化により瘦せたと聞いて、その身を案じて贈つたもの。儋州の食糧事情もまた、かなり劣悪であつたようである。蘇軾の詩によれば、當地では長芋を主食とし、タンパク源として鼠の燻製や焼いた蝙蝠なども食べていたと言ふ。

土人頓頓食諸芋 土人 頓頓として 諸芋を食らひ

薦以薰鼠燒蝙蝠 薦むるに薰鼠と燒蝙蝠を以つてす

唐代以前の儋州（海南省）は、ほとんど未開の地と言つてよく、唐代までの詩人で彼の地にまで至つた者は、確認されない。その意味では、「食材としての蝙蝠」を描いた蘇軾の詩は、蘇

賦にまつわる特殊事情による極めて稀有な例と言えよう。

一方で、同じくわずか一例のみの【猛禽類に捕獲される蝙蝠】については、【蚊を捕食する蝙蝠】とともに、後世に詠い継がれていく。例えば元・岑安卿は、「蝙蝠」と題する五言律詩の頷聯において、對句を用いて以下のように詠う。

饑惟掠蚊蚋 饑うれば惟だ蚊蚋を掠むるのみ
飛不避鷹鷂 飛べば鷹鷂を避けず

五、結語

以上、蝙蝠を詠った宋詩の例について概観した。以下、これまでの要點を整理し、さらにそこから確認できる點を指摘して、本稿の結語としたい。

- ① 蝙蝠を詠った宋詩は全部で三十四例を数えるが、そのうち《蝙蝠を主題として詠う》ものは一例のみで、その他の三十三例は《蝙蝠を素材として詠う》ものであった。
- ② 蝙蝠は、鳥でも獣でもないその異様な形状や、暗闇に棲息し夜間に活動するその異常な習性などから、《蝙蝠を主題として詠う》唐代までの詩においては、嫌惡の対象、不快な存在、不幸または哀れな存在として、否定的に描かれていた。その點については、宋詩の一例(26)においても同様の傾向が認められた。

中國の古典詩に見える蝙蝠(矢田)

- ③ 蝙蝠には上記のような否定的なイメージが認められることから、従來の詩では、寂れた場所や作者のうらぶれた状況を際立たせる素材として詠われることがあったが、宋詩においても同様の例(12 14 18 21 24 27)が見られた。
- ④ 一方で、長壽の鼠が蝙蝠に變身する、あるいは長壽の蝙蝠は白色に變色するとの傳承、および洞天説との關わりから、従來の詩では、長壽の象徴、神祕的な存在、さらには脱俗的なイメージを添える素材として、好意的に詠われることもあったが、宋詩においても、長壽の象徴としての例(32)、神祕的な存在としての例(04 05 08 31)、脱俗的なイメージを添える例(06 15 16 19 23 28 30 33 34)が、それぞれ見られた。
- ⑤ 夜行性という蝙蝠の習性に着目し、従來の詩では、蝙蝠を晝夜の別を辨える存在として描く例が見られたが、宋詩においても、蝙蝠のこうした習性を肯定的に捉え、黄昏時や夜の訪れを認識させるものとして描く例(07 09 10 17 20)が見られた。
- ⑥ 従來の詩では、蚊を捕食するという蝙蝠の習性に着目し、それを詩に詠う例は皆無であったが、宋詩には複数の例(01 02 13 22 25 26 29)が見られた。
- ⑦ 蝙蝠を詠った詩の宋代における新たな展開として、「蚊を捕食する蝙蝠」を詠った例のほかにも、わずか一例ずつ

ではあるが、「猛禽類に捕獲される蝙蝠」を詠った例(03)と「食材としての蝙蝠」を詠った例(11)が見られた。
 ⑧ そのうちの「猛禽類に捕獲される蝙蝠」については、「蚊を捕食する蝙蝠」とともに、後世の詩に詠い繼がれていくことが確認できた。

蝙蝠を詠った宋詩は、大きく〈従來の詩の流れを汲むもの〉と〈宋代に新たに展開したもの〉とに区分することができよう。ここで整理した②③④⑤の例は前者に、⑥⑦の例は後者に屬するであろう。最後に、〈従來の詩の流れを汲むもの〉および〈宋代に新たに展開したもの〉について、それぞれに確認できる點を指摘しておきたい。

〈従來の詩の流れを汲むもの〉について確認できることは、宋代の詩人たちは、蝙蝠を否定的な存在として描く(②③)ことよりも、むしろ蝙蝠の習性や屬性を肯定的に捉え好意的に描く(④⑤)ことの方を、好んで繼承した、ということである。それは用例の数の差から見ても、明らかであろう。

吉川幸次郎氏は、宋詩の特徴の一つとして「悲哀の止揚」を指摘する¹⁵⁾。確かに宋詩の蝙蝠もまた、作者の孤獨や窮狀、寂れ果てた場などを詠った悲觀的な詩や閉塞感の漂う詩よりは、佛教寺院や故郷の舊居・庭園といった作者の心を世俗のしがらみから解き放ってくれる空間での作や、同僚や親族とともに過ぎす宴會や旅遊などの楽しいひと時を詠った詩など、前向きな詩

の方に、多く現れる。宋人による「悲哀の止揚」は、蝙蝠の詠い方という面においても、反映されていると言えよう。

〈宋代に新たに展開したもの〉について確認できることは、蘇軾の特殊事情による極めて稀有な「食材として蝙蝠」は例外として、後世の詩にも詠い繼がれる「蚊を捕食する蝙蝠」と「猛禽類に捕獲される蝙蝠」については、そのいずれもが梅堯臣の詩を初出とする、ということである。

梅堯臣は、北宋・仁宗期に活躍した詩人。北宋の初期には、晩唐の李商隱の詩を模倣し、對句や典故などの修辭や華美な表現を追い求める西崑體が流行していた。梅堯臣は、そうした西崑體の詩風に對して、「平淡」な表現の詩を推奨し、またその目は、日常生活の細部にまで向けられ、蚊や蠅、虱や蚯蚓など、身の回りに常に存在しながらも、従來、詩の素材としては見なされ難かったものに至るまで、詩に詠み込んだ詩人として知られる¹⁶⁾。以後、「生活への密着」は、宋詩の特徴の一つとして指摘されるに至るが、その道を切り開いたのは梅堯臣その人であり、まさに「宋詩一代の面目を開く者」であった¹⁸⁾。

蝙蝠もまた、常に身近に存在しながらも、その異様な形状や異常な習性などにより、従來、詩の素材にはなりにくいものの一つであったと言えよう。その蝙蝠を、宋代において、最も早くに詩に詠ったのが梅堯臣であり、また、それを最も多く詩に詠ったのも梅堯臣であり、さらには、その詠い方という面で新

たな展開を示して見せたのもまた梅堯臣であった。これもまた、宋詩独自の詩風を切り開いた梅堯臣だからその必然であったと言えようか。

【注】

- (1) 拙論「中國の古典詩に見える蝙蝠―唐までの詩を中心―」（『中國詩文論叢』第三十三集、中國詩文研究會、二〇一四年）。
- (2) 魏・曹植「蝙蝠賦」、唐・元稹「有鳥二十章・其九」、唐・白居易「洞中蝙蝠」など。注(1)所掲の拙論を参照。
- (3) 唐・韓愈「城南聯句」など四例。注(1)所掲の拙論を参照。
- (4) 晁説之の「淮口作」詩は、同時期の作と思われるが、當時の状況を詠って、「王畿胡騎滿、何地可逃生」（王畿に胡騎 滿ち、何れの地にか逃生すべけんや）」と言う。
- (5) 唐・皮日休「入林屋洞」など七例。注(1)所掲の拙論を参照。
- (6) 詩題に見える蕭千巖とは南宋・蕭德藻のこと。千巖居士と號した。詩人としての評價が高く、當時、南宋四大家（尤袤・范成大・楊萬里・陸游）と並び稱されていたと言う。本詩は、金紫巖の岩肌に蕭德藻の詩が刻まれているものと思ひ訪れてみたが、それがなかったので、代
- わってこの景勝の地を詠ったもの。
- (7) 『史記』卷六十三「老子韓非列傳」。
- (8) 唐・韓愈「山石」など三例。注(1)所掲の拙論を参照。
- (9) 文同の「東谷茅齋」詩にも、「野徑轉深密、靜無車馬痕、……俗塵何處入、長是掩溪門（野徑 轉た深密なり、靜かにして車馬の痕無し、……俗塵 何れの處よりか入らん、長えに是れ溪門を掩ふ）」と詠われている。
- (10) その序に、「淳熙丁未秋、僕自臨安通守以疾丐祠。既歸桂隱、遂捐故廬爲東寺、指新舍爲西宅、南湖以經其前、北園以奠其後。因枚立堂宇橋舟諸名、各賦小詩一篇、緣題述興、不拘一律。區區樂閒之心、聊用以自見云（淳熙丁未の秋、僕 臨安通守より疾を以て祠を丐ふ。既に桂隱に歸り、遂に故廬を捐て東寺と爲し、新舍を指して西宅と爲し、南湖 以って其の前を經、北園 以って其の後に奠く。因りて枚ごとに堂宇橋舟の諸名を立て、各おの小詩一篇を賦し、題に緣りて興を述べ、一律に拘らず。區區樂閒の心、聊か用ひて以て自ら見すと云ふ）」と言う。
- (11) 唐・徐夤「驕侈」。注(1)所掲の拙論を参照。
- (12) 唐・吳融「無題」。注(1)所掲の拙論を参照。
- (13) 算文生著『梅堯臣』（岩波書店、中國詩人選集二集、一九六二年）では、貧乏人ばかりをいじめる下級官吏を「蚊」に、それを取り締まろうとしない無能な檢察官を

中國詩文論叢 第三十四集

「蝙蝠」に、それぞれ擬えた人間の社會に對する痛烈な風刺の詩と、本詩を見る。

- (14) 詩の全文は以下の通り。ここでも蝙蝠が主題として詠われる折りには、依然として否定的な存在として詠われていることが確認できる。「蠢爾不知賤、高高亦扈天、饑惟掠蚊蚋、飛不避鷹鷂、白晝身無措、黃昏意自便、緬思讒佞輩、與汝可周旋」(蠢爾として 賤しきを知らず、高高として 亦た天に戻る。饑うれば惟だ蚊蚋を掠むるのみ、飛べば鷹鷂を避けず。白晝 身は措く無く、黃昏 意は自ずから便なり。緬かに思ふ 讒佞の輩の、汝と周旋すべきを)。

- (15) 吉川幸次郎著『宋詩概説』第七節「宋詩の人生觀 悲哀の止揚」(岩波書店、中國詩人選集二集、一九六二年)。
 (16) 笈文生著『梅堯臣』(岩波書店、中國詩人選集二集、一九六二年)。黃美鈴著『歐・梅・蘇與宋詩的形成』第四章「淵雅自適與日常生活化的特色」第三節「梅詩與日常生活—化俗爲雅」(文津出版社、一九九八年)。

- (17) 吉川幸次郎著『宋詩概説』第四節「生活への密着」(岩波書店、中國詩人選集二集、一九六二年)。

- (18) 清・叶燮『原詩』外篇下に、「開宋詩一代之面目者、始於梅堯臣・蘇舜欽二人(宋詩一代之面目を開く者は、梅堯臣・蘇舜欽の二人に始まる)」とある。

また、南宋・劉克莊もまた『後村詩話』前集卷二において、宋詩における梅堯臣の功績を高く評價して、以下

のように言う。「本朝詩、惟宛陵爲開山祖師。宛陵出、然後桑濮之哇淫稍熄、風雅之氣脈復續。其功不在歐・尹下(本朝の詩、惟だ宛陵のみ開山の祖師と爲す。宛陵の出でて、然る後に桑濮の哇淫は稍く熄み、風雅の氣脈は復た續ぐ。其の功は歐・尹の下に在らざるなり)」。